

『南宋初期・四大武将の 財政に関する研究』

安 蘊 幹 夫

目 次

- 一. はじめに
- 二. 武将群と営田・屯田との関連
- 三. 四武将の財政分析
- 四. おわりに

一、はじめに

宋代には官僚・武将・寺院等が大土地所有、即ち荘園経営を行っていたことは周知のとおりである。すでに、朝廷よりの賜給、荒蕪地の開墾、違法占田、民田の侵奪等々によって所有地を拡大していったことは明らかにされている。⁽¹⁾

さて、南宋時代初期の、特に韓世忠・劉光世・張俊・岳飛に代表される武将達も例外ではなく、当時（南宋中期）の人葉適によって、「況乎大将殖私軍食」⁽²⁾と指摘されているように、大土地所有を行っていたことは明白である。さきに武将の一人である前出の張俊に関して、彼の勢力の拡大過程を詳細に検討してみた。⁽³⁾この稿においては、これら四武将の勢力の拡大と相応して、彼らは如何にして財政的に自己の軍隊を維持し、その上に如何にして大土地所有化＝荘園化、あるいは財の蓄積を行っていったのか。換言すれば、彼らの兵員数の増加とその時々⁽⁴⁾の経済状態との関係を探知しようとするものである。

二、武将群と営田・屯田との関連

張俊の大土地所有の実態として、建炎以来繫年要録（以下繫年要録と略）巻135、紹興十年夏四月乙丑の条に、

（張）俊喜殖産，其罷兵而歸也，歲收租米六十万斛

とあるように、張俊が租米60万石を納入している記事が見えている。即ち彼が大土地所有をなしていることは明白なのである。張俊は、「汝自小官朕拔擢至此，須当自飭如作小官時，乃能長保富貴為子孫之福⁽⁴⁾」とか、あるいは「帝於諸將中，眷俊特厚⁽⁵⁾」とあるように、高宗の寵愛を受けて大武将にまでなった人物である。こういう状況の中での彼のこの大土地所有について考察を進めてみよう。

三朝北盟会編巻237、紹興三十一年二月二十九日の条には、
二十九日戊辰張子顔等輸米助軍

右承議郎充敷文閣待制提舉江州太平興國宮子顔・右通直郎充敷文待制提舉祐神觀子正・右承事郎充集英殿脩撰主管佑神觀子仁・左朝散大夫充秘閣脩撰江南西路計度轉運副使兼本路勸農使宗元奏、臣等伏觀王師進封竊慮兵食須費用浩大，謹以私家積糧米一十万石進獻朝廷，伏望聖慈特令所屬各差人船前去逐莊，交割開具停米去处下項，湖州烏程縣烏鎮莊一万二千石，思溪莊八千石，秀州嘉興縣百步橋莊五千石，平江府長洲縣尹山莊六千石，東莊二千五百石，吳縣橫金莊二千五百石，儒教莊五千石，常州無錫縣新安莊七千石，宜興縣善計莊九千石，晉陵縣莊二千石，武進縣石橋莊一千石，宣黃莊七千石，鎮江府丹徒縣湊營莊二万石，新豐莊六千石，太平州蕪湖縣逸恭莊七千石，已上共計一十万石有旨令轉運使拘收

とある。子顔・子正・子仁は張俊の子供であり、宗元は孫である。張俊は紹興24年に死亡しており、この記述はその7年後のことであるので、明らかに彼らの所有している莊園は、張俊が所有していたものであったことにはまちがいはなからう。次に彼らの莊園の所在を地域的に見てみると、湖

州は両浙路，鎮江府は兩浙路，太平州は江南東路である。地域的な関連性を見るために張俊の地方での職歴を調べてみると，建炎3年7月浙東制置使⁽⁶⁾，建炎4年4月浙西江東制置使⁽⁷⁾，建炎4年8月江南路招討使⁽⁸⁾，紹興元年1月江淮招討使⁽⁹⁾，紹興4年10月浙西江東宣撫使⁽¹⁰⁾，紹興5年1月江南東路宣撫使⁽¹¹⁾，紹興7年8月淮西宣撫使⁽¹²⁾，紹興10年6月河南北諸路招討使⁽¹³⁾となっている。明らかに彼の勤務地と荘園の所在地との関連性を見い出すことができる。それでは如何にして荘園を各地につくっていったのであろうか。宋会要輯本，食貨2の16，紹興六年の条には，

二月三日，詔淮南西路兼太平州宣撫使劉光世・淮南東路兼鎮江府宣撫使韓世忠・江南東路宣撫使張俊，並兼營田大使

とある。即ち彼ら武将達は營田の事に関しても管理を行っているのである。明らかにこの史料は彼ら武将と屯田・營田との関連をうかがわしめるものであり，少しく史料を探ってみよう。

まず屯田と營田の区別については，北宋期の史料ではあるが，資治通鑑卷248，大中三年八月己丑の条に，

史臣曰，營田之名，蓋緣辺多隙地，番兵鎮戍，課其播殖，以助軍須，謂之屯田，其後中原兵興，民戸減耗，野多閑田，而治財賦者，如治沿辺例開置，名曰營田，行之歳久，不以兵，乃招置農民強戸，謂之營田戸，復有主務敗闕，犯法之家，沒納田宅，亦係于此，自此諸道皆有營田務

とあって，營田の名は国境地域の空地を指して言うものであり，番兵が耕作して軍須を補助する。こういう形式をとった耕作地を屯田という。その後兵乱のために内地においても閑田が目だち，耕作者として農民を招誘した。これを營田という。屯田は兵，營田は民に耕作させるという明確な区別がある。このことは文献通考にも「屯田以兵，營田以民，固有異制⁽¹⁴⁾」とあることから理解できる。しかし同じく文献通考に「咸平中營田襄州，既而又取隣州兵用之，則非単出民力，熙豐之間，屯營多在辺州，土著人少則不復更限兵民，但及給用即取之，於是屯田・營田，実同名異，而官莊之名，最後乃出，亦往往雜用兵民也⁽¹⁵⁾」

とあって、営田・屯田と言う名称はあっても実際の耕作者、即ち兵・民の区別はなくなっていることがわかる。南宋期の史料については、繫年要録巻44、紹興元年五月辛酉の条に、

荆南鎮撫使解潜言、所管五州絶戸及官田荒廢者甚多、已便宜辟直秘閣宗綱・権屯田使中奉大夫樊賓・権副使募人使耕、分収子利、詔以綱為鎮撫使措置、営田官賓為同措置官、渡江後営田自此始

とあって、また同上書巻60、紹興二年十一月乙亥の条には、

詔江東西宣撫使韓世忠、措置建康営田、募民如陝西弓箭手法

とあり、更には同上書巻61、紹興二年十二月甲寅の条に、

言者論、淮南多間田、而耕者尚少、今安復鎮撫使陳規措置屯営田、深得古者寓兵於農之意、望倣其制下之諸路、詔湖北・江東西・浙西屯田、令帥臣劉洪道・韓世忠・李回・劉光世措置、都督府総治

とある。即ち、以上三つの史料によって、北宋期と同じように営田・屯田の区別はなく、土地が荒廢している地域では軍兵・民戸を募集して耕作させる兵屯・民屯が併用されていたことを理解することができる。しかし江淮地方では、繫年要録巻98、紹興六年二月壬寅の条に、

都督行府奏、改江淮営田、為屯田、先是言、屯田者甚衆、而行之未見効という記述も見られる。

次に武将達との関連についてみると、宋会要輯本、食貨63、営田雜録の条に

（紹興二年）四月二十四日、臣僚言、竊見朝廷講屯田之策久矣、畧未見有所施設、願詔劉光世、軍中將校有能部卒伍、就耕者優加爵賞、歲入悉分其衆、自余曠土益募民開墾、每能率三五百人或千人、乃至数千人、遞補以官、三歲勿賦、則所在土豪及懷婦之人、自当有応募者、……、今歲閏四月稻田或尚可種、唯早凶之、詔劉光世措置施行

とあり、また同年、十二月二十八日の条には、

中書門下省言、湖北・江西・浙西路対岸荒田尤多、理合随所隸一就措置、詔湖北委劉洪道・江西委李回・江東委韓世忠・浙西委劉光世措置、仍令

都督府総治

とある。劉光世の軍隊中の兵隊を使つての田土の開墾、即ち兵屯と、同時に民戸を募集して荒地を墾田させた民屯とである。あるいは各地の武将達を使つての荒田の耕作を指示する記述である。この事は明らかに耕作地の復興拡大と、国庫特に軍費の増収を図った施策であると考えられる。更には、建炎以来朝野雜記、巻16、甲集營田にも

紹興三年韓世忠為江東宣撫司，上命措置建康營田，世忠言，荒田雖多大半有主難，以如陝西例請，募民承佃蠲三年租，滿五年，不言給佃人為世業，於是詔江北・浙西皆如之，田租初年全蠲，次年半減，四月己丑，尋又免科配役，十月辛卯，自後營田專用諸民

とあり、国策としての營田運営が行われていたことを物語っている。もう少し營田・屯田に対する国家の目的、目標等に関して史料を検索してみよう。まず、繫年要録巻42、紹興元年二月庚午の条に、

執政言，劉光世軍中乏糧，遣考功員外郎仇愈往究其實，上曰，光世一軍月廩万數，如此宜速為屯田之計

とあり、また同上書巻44、紹興元年五月戊午の条には、

沅州言，本州自熙寧末為郡，始創營田招置弓箭手四千人，靖康調發，往往不歸，今軍食窘急，乞以閒田募民承佃，招補弓弩手二千人余，助歲計從之とあり、更には、同上書巻47、紹興元年九月の条に、

初措置河南諸鎮屯田，侍御史沈与求亦言，今欲因沿江荒閒之田，募人屯耕，用為籬落兼資儲飼，此誠計之

とある。以上によって、軍費徴達のための財源としての屯田・營田経営が遂行されていることをうかがうことができる。なれば、軍費の増大は当然これらの経営をより多く促進させようとするものであるが、それに関しては、繫年要録巻82・紹興四年十一月乙丑の条に、

湖北荆襄潭州制置使岳飛言，襄陽等六州婦業人戸，全闕牛種，乞量借官錢，俟起稅日分四科，隨稅送納，又乞，支降錢米養贍官兵

とあって、政府からの貸付金によって種子及び生産道具を準備し、あるい

は、同上書巻84・紹興五年正月丙寅の条に、

詔淮南諸州荒間田段、並令宣撫司經画耕種、相兼応副軍中支用

とあって、荒廃田・間田の墾田耕種を計画し、収穫物を以って軍費に支出するように指示している。更には、同上書巻97、紹興六年一月丁亥の条に

国家贍養大兵之久、国用既竭、民力已困、切須專意措置屯田とあり、同上書巻98、紹興六年二月壬戌の条には、

殿中侍御史周秘言、江淮屯田誠財用之本

とあって、特に江淮地域の屯田の措置が、重要な位置を占めていることがわかる。今掲げた内の後二つの史料は、紹興6年に記述されたものであるが、当時の状態を権戸部侍郎王俱が、「兵革未息、屯戍方興大計、所入充軍須者十居八九、此国用所以常乏⁽⁶⁹⁾」と語っているように、金国との戦いが激しい時期である。こういう状況下では、特に屯田に対する財政的な意義も増大してくるようである。

屯田・営田の帰業者に対する政策の記述も見られる。即ち、繫年要録巻91、紹興五年七月乙亥の条には、

制置使岳飛言、水寨願帰業者二万七千余家、詔州郡存恤之、無得騷擾とあって、農業に復帰しようとする家族に対する優遇措置を申請しており、更には、同上書巻91、紹興五年七月丙戌の条に、

帰業之民、其田已為他人請佃者、以隣近間田与之、仍免三年租税、即原無産業願受閑田者亦予之、俟及半年比較諸県帰業人数、取旨推賞とあり、復業したいが、既に以前の自分の耕地を他人によって耕作されている者に対しては、近隣の間田を与え、3年間の租税の免除を実施している。あるいは同上書巻51、紹興二年二月丁丑の条に

始淮南営田司、募民耕荒頃収十五斛、及是宣諭使傅崧卿言、其太重、故百姓帰業者少上用崧卿言、詔損歲輸三之二、俟三年乃征之、仍賜崧卿錢五万緡、俾民為牛種之費

とって、具体的な営田への帰業の実態を述べている。南宋における屯田・営田については、既に周藤吉之先生によって詳細に論究されており、ここ⁽⁶⁹⁾

では、武将達を中心とした軍事費との関連のもとに考察を進めている。以上述べてきたように、当時政府は屯田・営田政策を前面に打ち出すことによって、当面の課題である軍事費の確保に努めていたのである。しかし一方では、屯田政策での多大な出費に対して憂慮する史料も見られる。即ち、繫年要録卷98、紹興六年二月庚子の条に、

今軍事之際、兼措置屯田所費益広、已遂急取撥応副使用、乞俟支使了畢、具实数奏請除破、從之

とある。がしかし、全体的な政策の傾向としては圧倒的に屯田・営田政策を推進していたと判断できる。しかし問題点も存在する。これら営田を武将達によって侵奪されることもあるし、官田の売買に際しては彼らが購入して、大土地所有の展開即ち荘園経営を行っていったことである。

まず張俊について考察してみよう。彼の所有していたであろう荘園に関しては既に述べたが、税納物に関して、宋会要輯本食貨9の条に

紹興四年七月十九日、神武右軍統制張俊言、臣家近於逐処置到産業、除納夏税正税役錢外、其応干非泛諸般科配和預買等、並乞蠲免、特依既而臣僚言、望命有司檢会見行官戸科敷及和預買等条法、剗与俊、使俊曉然知、即今自見任宰臣以下、或有産業並与百姓一等均科、又言、今統兵官尚多使、各援此例以来免、不知何説以拒之、伏望断以不疑収還、所降指揮、是乃所以安俊也、詔前降指揮更不施行

とある。即ち、夏秋・秋税・役錢・科配・和預買絹を納入しており、一般百姓と何らかわる⁰⁸ことのないことがわかる。これらの税の免除を申請しているが、結局は高宗から拒否されている。税の免除の申請については、次のような例もある。即ち、繫年要録卷 135、紹興十年夏四月乙丑の条には少傅淮西宣撫使張俊、乞免其家歲輸和買絹、三省擬每歲特賜俊絹五千匹、庶免起例、上以示俊因輸之曰、諸將皆無此、独汝欲開例、朕固不惜、但恐公議不可

とあって、和買絹の免除を申請したが、絹 5,000匹を賜って却下されている。この絹 5,000匹の賜与については、次のような批判がある。即ち前文

に続いて

中興聖政史臣曰、賦絹天下之公法也、賜絹一人之私恩也、上平時待將臣厚矣、至其規免戸賦、則用歲賜以塞之以為盜、過於私恩不可少、害於公法也、有公法所以不起其例隆私恩所以不失其心、聖人之御將誠有道矣とあるのがそれである。

既な前にも述べているように、「俊喜殖産、其罷兵而帰也 歳収租米六十万斛⁹⁹」とあることから、張俊の経済的基盤としての荘園は、より重要性を帯びていたことがはっきりくみ取れる。

一方では、張俊に対して次のような批判もある。繫年要録巻78、紹興四年七月丁丑の条に、

張俊戸禄素殮、坐与卒伍争利、徒能費太倉米

とあり、あるいは同上書巻 114 紹興七年九月辛未の条には

臣聞、張俊一軍号曰自在軍、平居無事未嘗閱習、甚至於白晝殺人而図其財者、惟韓世忠・岳飛兩軍人馬整肅、其失有傷於太嚴とある。これは張俊個人に対するものと、軍兵に対する批判である。彼の性格の一端をうかがえる史料として興味深い。

次に韓世忠についてみよう。これに関連している史料を二・三列举してみると、繫年要録巻74、紹興四年三月乙亥の条に

韓世忠乞承買平江府朱勔南園、及請佃陳滿塘官地一千二百畝 詔以園地賜世忠

とあり、朱勔の南園の払い下げと陳滿塘官地の請佃の二つの申請である。結局は園地を賜与されている。これに関連した史料が繫年要録巻 101、紹興六年五月丙辰の条に

詔以平江府陳滿塘地、賜韓世忠、以世忠婦所賜南園而請佃塘地、故撥賜焉とあって、前の事項がはっきりと理解できる。次に、繫年要録巻 147、紹興十二年十二月己卯の条に

太傅醴泉觀使潭国公韓世忠奏、先蒙賜田土并私家所産置良田、歳収数万石、願以三年所収之数、獻納朝廷以助軍儲、不許

とあり、更には同上書巻 148、紹興十三年正月癸巳の条に

太傅醴泉觀使潭國公韓世忠，請以其私產及上所賜田統計未輸之稅，併歸之官，從之，仍賜詔獎諭

とある。彼もまた承買・請佃・賜与によって大幅な土地所有をやっていたことが理解できる。

劉光世の場合には、莊園経営の実態が顕著に現われている。即ち、繫年要録巻84、紹興五年正月癸酉の条に、

淮西宣撫使劉光世乞，以所置淮東田於淮西對換，上許之，（晏）敦復言，……，光世先在淮東置田之時，其所遣幹當使臣等，惟挾利便膏腴者取之，致民間多失旧業，此衆所共知不審，光世知与不知也，今又欲易淮西田，則其所遣幹當之人及州縣之吏，夤緣為姦，豈止取民三百頃已……，今光世以為私田，即復招誘人民歸業也

とあることから明らかである。

以上、四武将の内の張俊・韓世忠・劉光世の三人に例を取って、大土地所有の実態を史料によって裏付けしたわけである。そこには明らかに莊園経営が行われたことが理解できた。

この外にも賜田，あるいは租賃の例もある。即ち、繫年要録巻95 紹興五年十二月乙酉の条には、

求売官田，則巨室租賃

とあり、また同上書巻113、紹興七年八月己酉の条には、

賜吳玠漢中田二頃

とある。

当時の営田の状況を見るには、次の史料がその間の事情をよく物語っているようである。即ち、繫年要録巻 118 紹興八年正月壬辰の条には、

左宣教郎監西京中嶽廟李橐守監察御史采自祠官召對上疏言，營田之法可為備善，然奉行峻速，或抑配豪戶，或驅迫平民，或強科保正，或誘奪佃客，給以牛者未必可用，付以田者或瘠鹵難耕，由官府有追呼之勞，監莊有侵漁之擾，鬻已牛而養官牛，耕已田而償官租，種種違戾不可概舉，其

問号为奉法，不擾者不過三数県而已尽，江淮西路以紹興六年秋收計之，雜色稻子共三十一万余石，公家所得纔十一万余石，使皆征出田畝亦少資助軍食，奈何皆奪民之力哉，蓋營田上策宜行軍中，乃古人已試之効，今以問田付之有常賦之民，官吏希賞畏罰，其患弥甚，欲望申飭有司無問民，則闕而不置使，江淮之民安土樂業，均被实惠，詔領營田監司約束とあって，官吏の不正を厳しく追求している。更には，次のような記述もある。同上書卷 138，紹興十年十一月甲子の条に，

右正言万俟卨論……，応有營田去处核実均放，其帥臣隱蔽不肯公共，以聞，上曰卨所論極，当大凡營田須軍中，自為之則不斂于民，而軍食足，若民舍已之田營軍之田，恐甚干斂民之為虐也，乃詔領營田監司措置とある。これは右正言万俟卨の意見であるが，それによると武将達の營田における収獲の隱蔽を指摘している。これに対して高宗は，營田からの軍費の補助と農民への税負担減という面から，營田政策の重要性を説いている。軍費の獲得と農民への誅求とは比例するもので，両者を強行することは社会政策的な面から考えても不可能である。その間のことを，繫年要録卷113，紹興七年八月の条に

是月……，夫今日之患，欲民力寛則軍食闕矣，欲軍裕則民財乏矣，二者如鉄炭之低昂

と表現されているのは，的を得ている。

以上，營田・屯田に関して主に武将との関連のもとで述べて来たが，要するに營田・屯田は，「紹興六年都督張浚奏，改江淮屯田為營田，凡官田逃田並拘籍」⁸³ともあるように，特に国境地域の官田・間田・逃田及び荒廢田を指しているものと思われる。營田の経営の目的は，金国との戦時によって荒廢した農地の復興にあり，あるいは戦時によって流亡（離散）せざるを得なかった農民の帰農（帰業）にあり，そして増大しつつあった戦費の補填にあったと考えられる。これらの目的を持って国家は，營田政策を遂行していったのである。この過程において武将達は，賜田・承買・請佃などの手段によって大土地所有化をなし，莊園化していったであろうと考

えられる。

三、四武將の財政分析

次に四武將の財政的側面をみることにしよう。まず、四武將の兵数の増加過程を見ると表Ⅰの如くである。⁽⁶²⁾

表Ⅰ

	張 俊	韓 世 忠	劉 光 世	岳 飛
建炎元年時 (兵数)	1,000人	1,000人	3,000人	—
3・4年時 //	8,000	8,000	12,000	2,000人
紹興2年時 //	30,000	40,000	40,000	23,000
5年時 //	50,000	50,000	50,000	30,000

次に彼らの職歴を見ると表Ⅱの様である。⁽⁶³⁾

表Ⅱ

	張 俊 (使 職)	韓 世 忠 (使 職)	劉 光 世 (使 職)	岳 飛 (使 職)
建 炎 元 年	—	—	制 置 使	—
3 年	制 置 使	制 置 使	御營副使 兼宣撫使	—
4 年	招 討 使	//	安撫大使	鎮 撫 使
紹 興 元 年	//	宣撫副使	安撫大使 兼宣撫使	—
2 年	—	宣 撫 使	//	—
3 年	—	//	宣 撫 使	制 置 使
5 年	宣 撫 使	//	//	招 討 使
6 年	//	//	//	宣撫副使
7 年	//	//	罷 免	宣 撫 使

表Ⅰを見ると、紹興2年の前年に比較した兵員増加率は目ざましいもの

がある。これは主に金国の侵犯に対して南宋の軍を備えたためによる。この年の駐屯軍の費用に関しては、繫年要録卷59、紹興二年十月の条に、

是月尚書右僕射朱勝非，上經營淮北五事，一謂国家屯軍二十万，月費二百萬緡

とあり、紹興2年10月の駐屯軍の費用は200万緡と言っている。そこで、この時期の軍費の負担を史料によって見ると、繫年要録卷49、紹興元年十一月甲辰の条に、

詔以鎮江府常州陰軍苗米三十七万解，為劉光世軍中一歲之用，仍令漕臣分月給之

とあり、更には同上書卷54、紹興二年五月丙戌の条に、

今乘輿服御之費十去七八，百官有司之費十去五六，至此而每益於国者，軍政不修，而軍太穴也，張俊一軍以川陝贍之，劉光世一軍以淮浙贍之，李綱一軍以湖広贍之，上供之物得至司農太府者無幾矣，計行朝每月官吏之費寡，軍兵之費多

とあって、張俊は四川・陝西・劉光世は江淮・両浙地域の租税でそれぞれの軍隊を運営している。しかも、1カ月ごとの費用の支給を基本としているようである。しかし、租税だけでは増大する軍費に対して応需することはできず、専売品である酒・塩・茶課を以って補助している。即ち繫年要録卷53 紹興二年四月庚午の条では、

浙西安撫大使劉光世言，軍中糧乏

とあって、当時浙西安撫大使であった劉光世は、軍隊の食糧の不足を訴えた。これに対して当局は、繫年要録卷56、紹興二年七月丁丑の条に、

詔兩浙漕臣梁沙嘉措置鎮江府鼎酒稅務，以其錢助劉光世軍費

とあり、鎮江府鼎の酒稅務での息錢で補助している。その外に茶・塩課での補助も見えている。今、二つの事例を挙げると、繫年要録卷59、紹興二年十月己酉の条には

乃是呂頤浩因進呈言，茶塩權酤，今日所仰養兵

とあり、更には同上書卷61、紹興二年十二月甲午の条に、

今養兵大費，多仰塩課

とある。このような例は四川においても見られる。即ち繫年要録巻 118，紹興八年正月乙亥の条に，

秘書省正字兼樞左司郎官孫道夫嘗言，四川自米元無都漕，自宣司以隨軍漕兼総領財賦，俾措置茶塩酒息，通融贍軍

とあるのが例である。また便錢法による見錢関子での支払いによる商人からの軍需物資の調達も行われた。即ち，繫年要録巻48，紹興元年十月壬午の条に，

尚書省言，近分撥神武右軍，往婺州屯駐，合用錢理須樁辦，緣行在至婺州不通水路難以津搬，契勘便錢之法，自祖宗以来，行於諸路，公私爲便，比年有司奉行不務經久，致失信於民，今來軍興調度，与尋常事体不同理，当別行措置，詔戸部印押見錢関子，降付婺州召人入中，執関子赴抗越權貨務，請錢每千搭十錢爲優潤，有偽造者依川錢引抵罪，東南會子法蓋張本於此

とあることから理解できる。

最も兵員数の増加をみているのは紹興5年である。この頃になると国家財政は赤字の様相を呈し，軍費も増加して，供給の不足の状態が多かったようである。まず繫年要録巻92，紹興五年八月癸丑の条に，

戸部(呂)祉言，国家所務財用爲先，嘗竊計一歳之入不足以供一歳之入不足以供一歳之出，此臣所深憂也

とあって，戸部呂祉は，国家の支出に対して収入が不足している実態を述べている。更に軍費に関しては，同上書巻93，紹興五年九月丁亥の条に，

都督行府言，契勘屯駐軍馬，比去歳其数過倍，費用浩瀚，皆自行在措置応副とあって，軍馬に必要なとする費用の増加，そのための当局の措置を述べている。しかし，実態に至っては，翌年の九月の項に「沿江一帶 皆無軍馬」の状態であり，善処されているとは思われない。また繫年要録巻95，紹興五年十一月壬辰の条に，

殿中侍御史王縉言，竊見去年冬間，総理財計之，臣以贍養大兵急闕

とあり、紹興4年の冬季の軍費の欠乏を述べている。あるいは次のような史料も見えている。即ち、繫年要録卷87、紹興五年三月癸卯の条に、

資政殿大学士知福州張守言、……、今之大將皆握重兵貴極富溢、前無祿利之、望退無誅罪之憂、故朝廷之勢日削、兵將之權日重、……、考祖宗以來、每歲上供六百余萬、悉出於東南轉輸未嘗以病也、今宜拳兩浙之粟以餉淮東、江西之粟以餉淮西、荊湖之粟以餉岳鄂荆、商量所用丸數、責漕臣將輸、而歸其余於行在、錢帛亦然、恐未至於不足也

とあって、上供できなくなった時の不足を恐れている。時代は経るが同上書卷 127、紹興九年三月丁未の条には、

殿中侍御史謝祖信言、東南之財尽於養兵、民既困窮、国亦虚弱、然此所費止於養兵一事

とあり、明らかに軍費が国家財政及び一般民衆に対して圧迫していることがわかる。

南宋朝の国家財政を考える時、対金国との攻防が大いに影響を与えている。即ち対外的軍事費の支出が、財政支出の大部を占めているからである。秦桧によって進められた紹興11年の金との和議は、宋朝財政にとってより大きな効果をもたらしたと考えられる。繫年要録卷 143、紹興十一年十二月乙丑の条には、

上謂秦桧曰、和議已成、軍備尤不可弛、宜於沿江築堡駐兵、令軍中自營田、則劍不及、而軍食常足、可以久也

とあって、高宗は、軍備を弛めることはできないが、国境地域に兵隊を駐屯させ、屯田を行えば一般民衆への税役の圧迫はなく、軍隊の食糧は満たされると説いている。和議成立の当事者である秦桧は、国家財政について次のように述べている。即ち、繫年要録卷 154、紹興十五年七月己巳の条に、

秦桧言、近来戸部歳計稍足、蓋緣休兵朝廷又無妄用故也

とあって、休兵によって国家財政は充足していると言っている。しかし同上書卷 155、紹興十六年十二月辛亥の条には、

進士章奎上書言、国家向緣軍興之故、財賦屈乏、乃於民間預借、其税以

済軍用、此不得已而行之耳、国家偃兵・息民固已有年・而預借之税今尚未免、且預借之弊折納太重

とあり、休兵・息民の状態で数年を経ているが、一般民衆に対する過酷な徴税が行われている実態を述べている。これらの問題、即ち秦桧の対金国和平後の宋朝国家財政については稿を改めて論究する予定である。ともかくも、この和平の締結された紹興11年を境として武将達は、軍人としての表舞台から去っている。

次に四武将個々人に関しての財政状態を考察していこう。

(イ) 劉光世

繫年要録卷45、紹興元年六月辛卯の条に、

輔臣進呈、言者論劉光世軍中穴費、……范宗尹曰、今月給錢十六万緡、米三万解

とあり、更に同上書卷49、紹興元年十一月甲辰の条には、

詔以鎮江府常州江陰軍苗米三十七万解、為劉光世軍中一歲之用、仍令漕臣分月給之

とある。既に述べたように、軍隊への充足の費用は、通常租税を以って充当している。彼の場合、建炎3・4年頃は約12,000人の兵員数であるが、1ヵ月間の費用として錢16万緡・米3万石強を支給されているようである。しかし翌年4月には「浙西安撫大使劉光世言、軍中糧⁶⁴乏」とあり、軍糧の不足を言っている。そこで同年6月には会計簿の点検が実施されている。即ち繫年要録卷55、紹興二年六月丙午の条に、

遣殿中侍御史江濟・尚書度支員外郎胡蒙點檢劉光世軍中將士告帖、具每月合請錢糧實數、以聞、時都督官呂頤浩、至鎮江而軍中告乏、頤浩言、光世軍月費錢二十二万緡、除取撥鎮江一郡財賦外、朝廷已應副其半、望令台部堂各一員考究、如有闕數乞尽行支降、如無闕數亦乞行下光世照會、故有是旨

とあって、都督官呂頤浩は、劉光世の軍は1ヵ月に22万緡の錢を使用していることを報告している。この報告に基づいて、劉光世の軍は毎月の必要

経費の実数を申請することによって、それだけの額の支給を受けることとなった。しかし、この史料の註に、

此事殊失本旨，蓋頤浩疑光世軍中詭名冒請者多，錢糧初不乏，非謂少錢而乞朝廷応副也

とあって、実際のところ本当に軍費が不足としているのかどうか疑問視している。

次は紹興3年の史料であるが、当時（紹興2年時）の兵員数は40,000人に増員されている。繫年要録卷63，紹興三年三月戊午の条に、

初浙西安撫大使兼知鎮江府劉光世言，本軍月費錢二十七万緡，朝廷及漕司纔応副十六万七千有奇，雖有取撥鎮江一郡財賦之名，而兵火之後所入微細，欲尽撥歸漕司，祇乞貼数応副，都省言，浙西提刑司具到鎮江酒稅課利田賦，以紹興元年計之，総為乙百余貫石四兩，兼本府水陸要衝商賈輻輳，若諸色稅課悉歸公上，則比之前日不無増羨，乃如光世所奏財賦並令漕司拘収，酒稅令兩通判措置

とある。即ち国家は月額16万7千緡を支出している。

以上が国家から定期に受納する軍費の額である。この外に論功行賞等の理由によって臨時的にも援助を受けている。それらについては史料を列挙しておくにとどめよう。

繫年要録卷58，紹興二年九月戊寅の条，

罷鎮江府織御服羅，上輪輔臣，方軍興有司匱乏，豈可以朕服御之物為先且省七万緡助劉光世軍費也

同上書卷64，紹興三年四月庚戌の条

詔江東宣撫使劉光世，月給公使錢七百五十緡

同上書卷68，紹興三年九月乙亥の条

江東宣撫使劉光世為江東淮西宣撫使置司，……賜光世錢十万緡為營壘費

同上書卷82，紹興四年十一月丙寅の条

遣內侍李省往劉光世・岳飛軍注浩・往韓世忠・張俊・王燦軍撫問將士家

属，仍賜錢有差

〔註〕 三宣撫使軍各万緡，岳飛三千緡，王燮二千緡

同上書卷84，紹興五年正月癸亥の条

詔韓世忠・劉光世・張俊各賜銀帛三千匹兩

(四) 岳飛

繫年要録卷68，紹興三年九月丙寅の条に，

時岳飛軍月費錢十二万二千余緡・米万四千五百余斛

とある。彼の場合紹興2年時の兵員数は23,000人で，1カ月間の消費高は錢12万2千余緡・米1万4千5百余石である。この前月に国家より軍糧の支給を受けている。即ち，同上書卷67，紹興三年八月己丑の条に，

乃命出撫州椿管錢九万余緡・江西折帛錢，易糧万斛以餉飛軍

とあって，撫州の椿管錢9万余緡と江西折帛錢とを支出して食糧にかえ，岳飛に支給している。

史料に見える国家からの援助額をひろっていこう。繫年要録卷75，紹興四年四月乙未の条に，

初命曾紆，以錢米六万貫石，餉江西制置使岳飛軍，為三月之費，至是飛言，芻粟皆竭，綱運未到，深恐有誤事機，故責之

とあって，3カ月分の費用として錢米6万貫石を支給しているが，馬料が欠乏しており，一刻も早く到着することを希望している。同上書卷82，紹興四年十一月丙寅の条には岳飛三千緡とあって，3千緡を賜っている。同上書卷85，紹興五年二月の条には，賜岳飛銀帛二千匹兩とあり，同上書卷98，紹興六年二月己亥の条に，

詔江西轉運使，於去年上供米内，共撥二万石付師臣，為賑濟之用，即不得有妨応付岳飛一軍米数

とあって，米2万石が支給されている。

しかし，次のような過大申告を指摘されている。即ち，繫年要録卷113，紹興七年八月丙申の条に，

霍蠡在鄂州応副岳飛軍錢糧，……先是数飛言，軍中糧乏，乃命蠡按視，

至是蠡言，飛軍中每歲統制統領將官使臣三百五十余員，多請過錢十四万余緡，軍兵八千余人，多請過一千三百余緡，總計一十五万余緡とあることから理解される。

以上が岳飛に対する国家からの援助である。このほかに、軍器所を設置して牛皮を要求している。即ち、繫年要録卷 138，紹興十年十一月甲子の条に，劉錡軍及韓世忠・岳飛皆造軍器所，乞牛皮至十余万張とあることから明らかである。

岳飛に関して最も注目すべき点は，商賈的な行為をなしていることである。史料によって示すと，繫年要録卷 141，紹興十年九月癸卯の条に，命軍器少監鮑瑀，往鄂州根括宣撫司錢物，先是湖北轉運判官注敘詹以書白秦桧言，岳飛頃於鄂渚置酒庫，日售数百万緡，襄陽置通貨場利復不贖，自飛罷未有所付，乞令副都統制張憲主之，……，上謂桧，聞飛軍中有錢二千万緡，昨遣人問之飛，对所有之数，蓋十之九人言固不妄也とあり，更に，同上書卷 144，紹興十二年三月庚戌の条には，尚書右司員外郎鮑瑀，総領鄂州大軍錢糧，先是瑀奏，岳飛軍中利源，鄂州并公使激賞備辺回易十四庫，歲收息錢一百十六万五千余緡，鄂州関引典庫房錢營田雜收錢襄陽府酒庫房錢博易場共收錢四十一万五千余緡，營田雜穀十八万余石，詔以鄂州七酒庫，隸田師中為軍需

〔註〕 毎年收息錢共五十八万余緡

とある。これらから如何に岳飛が商売人的才能に溢れ，収益金をあげていたかがわかる。また，營田からの雜收錢や雜穀を得ており，明らかに營田経営を行っていたことがわかる。

(ハ) 韓世忠

繫年要録卷63，紹興三年三月壬午の条に，

仍賜韓世忠広馬七綱，軍士甲千副，激賞銀帛三万匹兩，又出錢百万緡，米二十八万斛，為半歲丸用

とあって，月額にして16万7千の錢と米4万6千余石の支給を受け，そのほかに馬甲銀帛を賜与されている。彼の場合，紹興2年時の兵員数は40,000

人である。同年6月にも国家よりの支給を受けている。即ち、同上書巻66 紹興三年六月乙未の条には、

初韓世忠之軍建康也，詔江東漕臣月給錢十萬緡，以酒稅上供制等錢應副とあり，1ヵ月10万緡の増額をみている。この増額分は酒税錢・上供錢・經制錢で補充するのである。繫年要録巻82，紹興四年十一月丙寅の条に、

遣内侍李省往劉光世・岳飛軍注浩，往韓世忠・張俊・王燬軍撫問將士家屬，仍賜錢有差

〔註〕 三宣撫軍各万緡，岳飛三千緡，王燬二千緡

とあって，1万緡の賜与を受けている。同上書巻84，紹興五年正月癸亥の条にも、

詔韓世忠・劉光世・張俊各賜銀帛三千匹兩

とあり，銀帛 3,000匹兩を受けている。彼もまた岳飛と同じように軍器所を設置している。即ち，繫年要録巻 138，紹興十年十一月甲子の条に、

劉錡軍及韓世忠・岳飛皆造軍器所，乞牛皮至十余万張

とあって，軍器所の設置に伴って，牛皮を請うている。更には，樞密使となつてのことであるが，同上書巻 140，紹興十一年五月戊申の条に、

樞密使韓世忠言，自提兵以来，有回易利息，及収簇趨積軍須，見在錢一百万貫，排蹂楚州軍前軍中耕種，并椿管米九十万石，見在楚州封椿及鎮江府揚楚真州高郵縣江口瓜州鎮，正賜公使回易激賞等酒庫一十五，合行進納，望下所属交収，詔嘉獎

とあって，錢の蓄積，米の椿管を知ることができる。

(二) 張俊

張俊に関しては，定額を規定して錢米を支給した史料が見られないので，賜与された分について見ていく。繫年要録巻55，紹興二年六月癸未の条に

於是神武諸軍皆缺馬，乃命經略司，以三百騎賜岳飛，二百騎賜張俊とあって，馬 200騎を賜与されたことが記されている。宋会要輯本，礼56，紹興二年十二月八日の条に、

詔令張俊取見部清所管の確人数，特行犒設一次，仍每人支錢一貫文，合用錢令李光于戸部支給

とある。彼の場合紹興2年時の兵員数は30,000人であり，合計錢3万貫の支給を受けたことにはなる。更には，同上書，礼62，紹興四年三月二十三日の条に，

神武右軍都統制張俊言，擺拽本馬人馬于臨安府，候潮門外敷場内閱習陣隊，詔令戸部支銀一万兩，銀三万貫付張俊，充教閱激賞

とあり，銀3万貫を得ている。繫年要録卷78，紹興四年七月壬子の条には，

賜神武右軍都統制張俊錢十万緡，為除戎器之用，仍以金錢度牒中半給之とあり，除戎器の費用として10万緡を賜い，その内の半分は現金，残りは度牒で支給されている。紹興4年11月には1万緡の支給を受けている。更に，同上書卷84，紹興五年正月癸亥の条には，

詔韓世忠・劉光世・張俊各賜銀帛三千匹兩とあり，銀帛3,000匹兩の賜与を受けている。

四、おわりに

南宋の建国は，金軍南進という未曾有の非常体制下になされたもので，中原回復という大義名分のもとに武断的とならざるを得なくなり，ここに論究した四大武将即ち韓世忠・劉光世・張俊・岳飛らは，これらの与望を担って登場した武人達である。しかし武人派の台頭は，宋朝の君主独裁制と相容れられず，世論の支持があったにもかかわらず失脚していったのである。ここで言う南宋初期とは，これら四大武将が台頭し，失脚する以前までの期間を指すものである。

宋朝の南遷という金国との兵乱によって，江淮地方は荒廃し，国家としては耕地復興という重大な問題が浮かびあがってきた。そこで屯田・營田政策を用いることによってその問題を解決しようとした。即ち，營田の経営の目的は，大きく分けると農地の復興にあり，離散した農民の復業にあり，その収益金で増大しつつあった戦費の補填にあり，以上の三つに分類

できるようである。一方この間にあって、官僚・武將・寺院等による大土地私有化即ち莊園化が進行し、当然これら營田も莊園化の一つの対象として見られていた。ここに取りあげた四武將の内、韓世忠・劉光世・張俊については史料を検索してみた。その結果、明らかに大土地所有の実態をうかがうことができた。岳飛についても、營田の収入の記述が散見せられた。そこでは当然莊園をバックとした経済的基盤を期待していたであろう。莊園化のほかの方法としては、賜田・承買・侵奪などがあった。以上すべての考察は、武將との関連のもとでなされたものである。

次に四大武將の経済状態をみてみた。十分とは言えないまでも、国費から殆んどの援助を受け、おまけに彼ら自身も国家より俸給を受領し、軍事費増加による国家財政逼迫化にもかかわらず、順調に成長していった。岳飛に至っては、商賈的な行為も行って、相当の蓄財に成功していた。

以上のように、宋代を通じて行われていた官戸・形勢戸による大土地私有の流れにうまく乗り、これら四武將は財政的に安定していたようである

註

- (1) 河原由郎「北宋期・土地所有の問題と商業資本」西日本学術出版社。
周藤吉之「宋代莊園制の発達」(「中国土地制度史研究」東大出版会所収)。
- (2) 「水心集」巻4 財総論二。
- (3) 拙稿「南宋創草期の張俊の勢力拡大に関する覚え書き」広島経済大学経済研究論集1—4。
- (4) 繫年要録 巻135 紹興十年夏四月乙丑。
- (5) 宋史列伝 巻128 張俊伝。
- (6) 繫年要録 巻29 建炎三年十一月己巳。
- (7) 同上書 巻32 建炎四年四月己亥。
- (8) 同上書 巻36 建炎四年八月丁丑。
- (9) 同上書 巻41 紹興元年一月戊申。
- (10) 同上書 巻81 紹興四年十月乙卯。
- (11) 同上書 巻84 紹興五年一月癸亥。
- (12) 宋史 巻28 紹興七年八月乙未。
- (13) 同上書 巻29 紹興十年六月甲辰。
- (14) 文献通考 巻7 田賦考7 屯田の条。

- (15) 同上。
- (16) 繫年要録 卷96 紹興五年十二月辛亥。
- (17) 周藤吉之「南宋における屯田・営田官荘の経営」（『中国土地制度史研究』東大出版会所収）。
- (18) 繫年要録 卷50 紹興元年十二月壬申。
諸論 今日為百姓甚害者 無如科配一事 州県比年以來於常賦之外 別立一項
軍期科配一歲之間 一戸五七次 臣竊謂 与其許科配不若專責常賦 与其放逋欠
不若嚴禁敷率 今稅租・免役・和買及關征權酷之利 別無失陷則軍事所需何容不
足 伏望特降睿旨 今後除依法催科以備軍期外 其余非法科配一切停罷。
- (19) 同上書 卷135 紹興十年夏四月乙丑。
- (20) 宋史176 食貨上四屯田。
- (21) 山内正博「南宋建国期の武將勢力に就いての一考察」東洋學報第38卷に依拠。
- (22) 同上。
- (23) 繫年要録 卷105 紹興六年九月庚寅の条。
- (24) 繫年要録 卷53 紹興二年四月庚午の条。
- (25) 同上書 卷82 紹興四年十一月丙寅の条には
遣内侍李省往劉光世・岳飛軍注浩 往韓世忠・張俊・王撓軍撫門將士家屬。
（註） 三宣撫使各万緡。

〔本稿は昭和54年度広島経済大学特定個人研究助成による研究成果の一部である〕